

手塚富雄著作集

手塚富雄著作集 第一卷

定價五〇〇〇円

昭和五十五年十一月十五日印刷

昭和五十五年十一月二十五日発行

著者 手塚富雄

発行者 高梨茂

印刷者 青木勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一七
番 振替東京二二三四
〇一九八〇 検印廃止

手塚富雄著作集 第一卷 ヘルダーリン 上 目次

第一章 出生と少年時代

冒頭に

出生 父の身分・生地のこと

父の死 推測されるその人柄・その家系

母のこと

母の再婚 義父のこと・その死

ニュルティンゲンという町 シュワーベンとシュワーベン人

勉学の開始 母一人による養育

弟妹のことなど

クロップシュトゥックを読む

デンケンドルフ僧院附属学校

旧師ケストリンへの手紙 敬虔主義について

習作詩時代

マウルブロンの上級僧院附属学校にて

ルイーゼ・ナストのこと

カール・オイゲン大公のこと その妃フランツィスカへの

献呈詩について

三

三

七

二〇

二六

二

二六

三三

四

四

四

六

七

七

七

八

マウルプロンの寮生活

少年時の読書

ライン地方への旅

マウルプロンでの詩作

第二章 シュティフト学生として

世代の動向

シュティフトの生活

フランス革命の波瀾

シュティフト学内新規則問題

当時の詩作

勉強状況 スイス旅行など

哲学上の友人ヘーゲルとシェリング

古典への熱情

異性たち

テュービンゲン時代の諸讃歌

第三章 ワルタースハウゼンとイエーナ

六

一〇

一八

二七

二八

二八

三〇

三三

四〇

四四

四七

五一

五四

五五

五七

六〇

家庭教師就任

諸大家との接触 シンクレリアとの交友

窮迫 イエーナを去る

ヘルダーリンに愛の過誤があったか

第四章 ニュルティンゲンとフランクフルト

「生ける屍」

フランクフルトへ ズゼツテ夫人

心の春

相互理解と親愛

ヨーロッパ全般の戦況

ドリーブルクへの旅

ヘルダーリンとフランス革命

エーベルへの手紙

シラーとゲーテの批評

『ヒュペーリオン』

ヘルダーリンとヘーゲル

一六〇

一六一

一七二

一七六

一八五

一八五

一九九

二〇三

二〇八

二二三

二二三

二三八

二三三

二三八

二四一

二四六

二五九

暗影 ゴンタルト家を去る

ディオテイーマの手紙

フランクフルト時代の詩作

第五章 ホンブルクにて

沈鬱と怒り

ラーシュエタット滞在

詩作への決意とその対極

南独革命計画とその挫折

ヘルダーリンとシンクレレア

好意ある批評

雑誌発行計画と失望

外のおよび内的状態

ホンブルク時代の詩作

機會詩二、三

『婚礼の日を前にしてのエミールリエ』

『エムベドクレスの死』第一稿

二六三

二七五

二八五

二八八

二八八

二九七

三〇三

三〇六

三三二

三三六

三三九

三四〇

三五三

三六七

三八〇

三九〇

『エムベドクレスの死』第二稿

『エムベドクレスの基底』

『エムベドクレスの死』第三稿 其の完成放棄

美学・哲学諸論文

故郷に帰る

四二四

四二二

四三一

四四三

四九〇

注

五〇五

著者より

五二二

ヘルダーリン
上

亡き妻キクの霊に

第一章 出生と少年時代

冒頭に

ヘルダーリンの生涯と業績を中心としてその生の全容を探求したいというのが、著者の望みであったが、全容は望んでも汲みつくせるものではなく、詩人として人としての核心を擲もうとすることを忘れてはならないと、しだいに強く思うようになった。その核心についても実にさまざまな見解があり、彼への理解がまだ不十分であった時期のものは別として、ヘルダーリンの抒情詩においては自然は汎生命的な総体としてわれわれに示されるとの指摘⁽¹⁾、彼の予言者的・英雄的詩人としての面に最重点をおく見方、彼の敬虔性を中心としてその宗教性を闡明しようとする試み、また詩の本質を詩によって確立しようとする詩人としての彼を高く評価する見方、さらには彼における社会的革新性・進歩性に最も強いアクセントをおく立場等々、そのすべてはとうてい挙げつくすことができない。それらはそれぞれに真実を分有しているのであるが、著者としては、概念でかためた詩人像の呈示を目ざすよりは、この詩人において著者自身がどういう点で感銘を受けたかを自覚し、そこを出発点として詩人の受容をひろめ、また詩人の形成についてもそこから発展的に理解を進めてゆきたいと考えている。つまり直

接の接触による感銘を自身にとつての最も確かな事実としてそれを根拠にしたいのである。そうすることが自分としては彼の真実により近づきうる道ではないかと思つてゐる。

それで著者自身の告白になるが、著者がヘルダーリンの作から受けた最初の感銘は、品位の高いその文面になじんで離れぬ一種の悲しみの声調であつて、その後彼の詩業を読み進んで、その高さ、深さ、雄渾さに驚きをくりかえしながら、この感銘はいつもその驚きと表裏して消えることがないのであつた。著者が二十歳代のとき初めて接した彼の作品は『ヒューペーリオン』であるが、その最初の数ページを読んだだけで、この感銘は動かぬものになつた。やがて彼の作品や生涯の理解が増すにつれて、この人が深い孤独の人であることを確かな事実として感知することができ、あの悲しみの声調はこの孤独の感情から生まれ、それと一体のものであることが確認された。これがこの詩人に対する著者の最初の、そしてその信ずるところによれば存在としてのこの詩人の本質に触れた把握である。

では彼におけるその孤独はどういう性格のものだろうか。まず、それは彼の個人的境遇、並びに時代的環境に由来するとは考えやすいことだが、それだけでは覆いつくせない感じの残ることは否定できず、その少なからぬ部分が彼の生まれながらの素質と結んでゐることを思わざるをえない。それを著者は仮りに彼における受苦の素質と呼ぶことにしたい。境遇において世の習俗において彼に喜びを与えぬものから彼は一挙に袂を分つのではなかつた。そうではなくて彼はそれらをおのが内部に受けとめ、そのなかに心を沈めて、おのが切実な問題として悩んだ。一般的に言えば彼は彼の負う運命を、大事においても小事においても最も深く受苦する人であつた。ただし受苦しながら彼はそれらの悩みの根源であるものと妥協するのではなかつた。孤独のなかに受苦の度を増しながら、彼はそれを何らかの積極的な意味に転換してゆくのであつた。それについての具体的なことは後述することになるが、もし彼に孤独のなかのこの受苦の深みがなければ、彼の詩業はあれほどの力と眞実性をもつもの

にはならなかったと思うのである。

彼の孤独のもつもう一つの特性として彼が純粹な理想家であることを言いたい。彼の内面は、彼がかかわるすべてにおいて至高のものを渴望し、その現実化への願いを貫こうとした。それゆえ世の常のものとはおよそ彼はずむことができない。内面の願いが高いだけに、現実の世界においてはそれだけ孤独に悩まざるをえない。そしてその孤独がいよいよ理想的なものへの彼の思いを高めるのであった。このことは処世的にも彼の不遇の大きい原因となったと見られる。

このような性向の人（詩人や文人にとくに多いであろうが）が最もおちいりやすいありかたは、ただ自己の内面に住みついて自足し、現実世界を軽蔑することであろう。しかしヘルダーリンはそうではなかった。彼は彼の孤独をただ個人的・私的な悩みとして受苦するではなかった。個人的問題に躊躇することのできない彼の精神空間がそれを許さないのである。彼は彼の孤独のなかにしだいにその孤独をあらしめる最も根源的なものを感じ取っていた。それを一言でいうなら、時代の衰微ということになる。人々は自然から離れ、生命力に充ちた真の文化創造の力を失い、人と人とはたがい近くにありながら距たり合っている。このことを措いて他に真に悲しむべきことがあるうか。こうして彼は彼が力をあらわすことのできる活動圏、すなわち詩において公的に時代にかけかわる人になった。自己についてはなく、時代を嘆き悲しむのであった。

そしてこの嘆きから彼の詩業におけるあらゆる積極的なものが生まれ出るのであった。この時代を根柢から生氣と創造力の充溢したものにするために詩人は何をなしうるか、何をなすべきかを考え抜く。そのことが彼の詩作の最も重要な動機の一つとなる。そして来たるべき最も望ましい時代として彼は人間と神々々が親しく結び合い、その基礎の上に人間と人間との親和と宥和の一大共同を実現すべきことを待望する。神々とは現代が親密な接触を忘れた自然の根源的生命の深義における把握で、彼が時代の現状を問題としながら、それを救うために

最も深い、彼として究極の道を考えていたことがわかる。それらを彼は彼の精魂をこめた詩に歌いつづけるのであるが、その際、彼にとっては、詩は彼の思想や念願を表明する一つの表現手段というのではなく、詩こそ彼のいう神々を現代にあらしめて、大いなる宥和を実現すべき使命を担うもの、深義においてはこれを措いて真に人の心を動かし、創造の活力を現代に再生しうるものはないとの信念があった。詩は彼にとってよりも、時代にとってなくてはならぬものである。以上述べたことの細目は本文に俟つほかはないが、彼が再三待望して言う、人間と神々、人間と人間との大宥和によって実現されるべき「喜び」とは、実は時代の現実相に対する彼の悲しみ、嘆きと表裏をなし、そこから生まれた願いである。それゆえ彼がそういう「喜び」の至高の状態を歌うときにも、その底には秘められた悲しみの声調がある。それは彼が単に夢物語を歌っているのではなく、現実への悲しみを母胎とする心の底からの願いを述べているからである。彼に次のような二行詩がある。

ソボクレス

多くの人はこの上なく喜ばしいことを喜ばしく言おうとして徒勞を重ねた。

それはついにここに悲しみのうちにわたしに語りかけるのだ。

彼の敬誦するソボクレスに即して言われたことであるが、彼自身の詩の秘密もおのずからここに洩らされた感がある。

以上は多岐にわたる彼の世界を、ただ一つの角度から述べたにすぎないが、彼の本来の心情に触れることを出発点として彼の業績と人とに近づいてゆきたいというのが著者の願いであることを、自分自身にもはっきりさせておきたかったのである。

出生 父の身分・生地のこと

ヨーハン・クリスチアーン・フリードリヒ・ヘルダーリンは、一七七〇年三月二十日、南ドイツのヴュルテムベルク公国の北部にある、ネツカル川沿いのラウフェンに生まれた。父ハイインリヒ・フリードリヒ（一七三六一—一七七二）と母ヨハンナ・クリスチアーナ（一七四八—一八二八、ハイン家からハイインリヒ・ヘルダーリンに嫁す）の間の長子である。ラウフェンについてより詳しいことはすぐあとで言うことにして、ここでは、それがドイツ文学でわれわれの耳に親しい、美しい町ハイルブロンの南一〇キロほどのところにある、小さな町であることだけを言っておこう。ハイルブロンと聞くと、何よりもクライストの戯曲『ハイルブロンの少女ケートヒェン』を思い出す人が多からう。ゲーテもその処女戯曲『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』で、ここをその主人公の騎士の終焉の地とした。ヴュルテムベルク公国、またはこの公国を主要な部分とするシュワーベンについては、種々の面から述べなくてはならぬ機会が、今後幾度となく出てくるだろう。

わたしたちはまずヘルダーリンの生家の社会的地位をのみこんでおくために、詩人の父の身分に目を向けよう。父ハイインリヒは「僧院執事並びに宗務管理者」(Klosterhofmeister und geistlicher Verwalter)とでも訳すべき職務に任ぜられていた。これは軽い地位ではない。僧院というものは少なからぬ所有地をもっているのが常で、農業や林業の経営主でもある。執事は主としてその方面の事務の管理役である。

ただしこの国では、僧院そのものは宗教改革時以来廃止されていて、その執事とはかつての僧院に所属していた土地を、新教国となったヴュルテムベルクの「コンジストリーウム」(宗教院)のために経営管理するのが務め

であった。つまりコンジストリーウムの支配下にある一役人である。執事ハインリヒ・ヘルダーリンが現実にと
ういう仕事にたずさわっていたかは、エルンスト・ミュラーが、当時の公的な帳簿に直接当て詳しく報告して
くれている⁽²⁾。その帳簿には定められた形式のもとに、穀物や葡萄を主にする農産物の現物と金銭の出納、耕地、
牧草地、山林の小作料収入、管轄下の建造物の工事費などが、こまかに記録されているという。農民や市民への
資金貸付けも、仕事の一環であったようである。

そういうわけで、詩人の父は、社会的にいつてもその地方では名士であり、彼の妻すなわち詩人の母は、ラウ
フェンの上流夫人の一人であった。生活も豊かであって、この執事自身の所有に属する貯蔵室には大小の葡萄酒
樽が十六もあり、フランス風に装備された二人乗り四輪の軽馬車も彼ののもので、それを牽くべき馬と乗馬とは公
的に支給されていた。役職上何かにつけて一種の威儀を整えることを必要とし、またそれができる身分であった。

次には詩人の生地、およびその誕生の家の様子を頭に入れておきたい。ヘルダーリンは満二歳余で父の死に逢
い、四歳半のときラウフェンを離れることになるので、ほとんどこの地ことは記憶にとどまらなかつたであろ
う。しかし無意識のうちにこの最初の環境から彼の心のうちに沈むものがなかつたとは言えないであろう。父の
死後、母に連れられて父の墓に詣でたこともあつたろうと思う。後年の詩人はネッカー川沿いのこの誕生の地の
ありさまについて、詩の中できなりのことばをついやしている(「シュトゥットガルト」)。それはもちろん成人して
からの訪問の印象によつたものであるが、いずれにしても、彼がはじめてこの世の光を浴びたこの土地が彼にと
つて「神聖な」ものであつたことは、動かぬことであつた。

この町とその周辺の地層は、貝がら石灰岩層だそうで、川べりに露出している岩はもちろん、今も残る古い狭
い街路やそれに沿う低い家屋、ただけしからぬ城門など、すべては灰白色で統べられている感じである。もし
この町を洗う「青い流れ」がなかつたら、ここはあまりにも目立たぬ、さびしい土地であつたらう。しかし、そ